

翻 訳

## クリスティナ・ロセッティ作「王子の旅」

### 翻訳と解説

滝口 智子

イギリス、ヴィクトリア朝期の詩人クリスティナ・ロセッティ (Christina Rossetti, 1830-94) による第二詩集『王子の旅とその他の詩』(*The Prince's Progress and Other Poems*, 1866) より巻頭詩「王子の旅」を翻訳する。

「王子の旅」はロセッティの第一詩集『小鬼の市とその他の詩』(*Goblin Market and Other Poems*, 1862) 巻頭詩「小鬼の市」と同様、寓意的な物語詩であり、象徴を読み解くための解釈が多く行われてきた。この詩に寓意が込められているという暗示は、以下の点に見出すことができる。

- (1) 詩のタイトル “The Prince's Progress” は、キリスト教的寓意物語であるジョン・バニヤン (John Bunyan, 1628-88) 作『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678) に言及したものであり、詩の内容もバニヤンの描く主人公が経験する「魂の旅」を思い起こさせる。
- (2) 雑誌『マクミラン・マガジン』(*Macmillan's Magazine*, VIII, 1863) に初出時のタイトルは現タイトルとは異なり、「到着の遅すぎた妖精王子」(“The Fairy Prince Who Arrived Too Late”) であった(この時発表された作品は、全 540 行にわたる「王子の旅」全詩行中の最終 60 行のみ)。この初期タイトルはエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1552-99) による寓意的騎士物語詩『妖精女王』(*The Faerie Queene*, 1590, 1596) を想起させる。
- (3) ストーリーは、寓意的な解釈を呼ぶおとぎ話「眠りの森の美女」を下敷きとし、「眠り」のイメージの象徴性を前面にうちだしている。

詩は、「地の果て」にいる王子の到着を待ち続ける姫が、侍女に促されて眠りにつく場面からはじまる。姫は王子の夢を見る。(以下に登場する王子は姫の夢の中の王子か、それとも現実の王子かどうか判然としない。) 王子は、ロマンス(探求譚)のヒーローとして、はるか彼方に暮らす姫を獲得するための旅に出ることが期待される。ところが彼は夢うつつに日々を送り、クッションにもたれたまま、重い腰をなかなかあげようとしなない。やっと決心して旅に出るも、旅の途上で数々の困難や誘惑にあい、到着はいつそう遅れてゆく。これらの困難は『天路歷程』の主人公が出逢う試練と同様に、キリスト教的な含意をもつ。だが王子はそれらの象徴的な意味を正しく理解できず、それゆえ正しく行動できない。このことは、やがて彼の探求の失敗へとつながってゆく。

訳者は近刊の小著で「王子の旅」を論じている。18～19世紀にイギリスで英訳が出版されたペローとグリムのおとぎ話「眠りの森の美女」の観点から、この作品の文化的・記号論的分析を試みた。「王子の旅」における目覚めと眠りはヴィクトリア朝期の「時間」に対する二つの態度（進歩志向とそれに対する反動）を映し出す。作品を構造的に見れば、「王子の旅」は〈姫の物語〉の中に〈王子の物語〉が入れ子として挿入された、いわゆる枠物語である。姫と王子は互いを主人公とする夢を見ており、その意味で互いの作者であり分身であると考えてもよい。「眠りの森」に登場する妖精の役割は、「王子の旅」において姫の侍女たちが担っている。侍女たちは自在に時空を超えて、姫と王子に目覚めと眠りの魔法をかけて二人を制御し、最終的に彼らの物語を乗っ取ってゆく。侍女たちの正体は、姫と王子の内面に住む「多重の声」なのだろうか。詳しくは、拙著「『眠りの森』とクリスティナ・ロセッティの物語詩「王子の旅」」『比喩—英米文学の視点から』（文学と評論社編、英宝社、2019年刊行予定）を参照されたい。

翻訳の底本として次の文献を用いた。*Goblin Market, The Prince's Progress and Other Poems* by Christina Rossetti (with Four Designs by D. G. Rossetti), London: Macmillan and Co., 1875.

なお、翻訳に添えた挿絵は訳者自身によるものである。

## 王子の旅

THE PRINCE'S PROGRESS.

甘い樹液と蜜に満たされ

ひらくのはいつの日か 花の中の花よ

長いながい時が過ぎ 訪れては過ぎゆく

花嫁は眠り 目覚め 眠りにつく

来ないひとを待ちつづけて——

ほら 花嫁が泣いている。

「いつまで待てばいいの 夏が来るまで 冬が来るまで？」——

「頼もしい王子さまがきつといらっしゃいます それまでのご辛抱」

（姫の侍女たちが言う）「山も河も乗り越えての辛い旅ですもの

眠って夢をごらんになるのが一番

お眠りなさいませ」（彼女たちは言う）「鐘の音も聞こえぬよう

塞ぎましたわ 泣いているより夢をごらんください」

そのころ頼もしい王子は地の果ての宮殿で寛いでいた

クッションとマットにもたれて

旅装束の杖と帽子をかたわらに置いたまま

「花嫁がお待ちかね いつお立ちになるの 王子様」——

「今宵は満月 この時を待っていたのだ

本当だよ もう出かけるところだ

「だが教えてくれ わたしの運命を司る真実の声よ

ヴェールをつけた花嫁 美しい乙女のことを

昼も夜も待っているのか

眠っても目覚めてもわたしのことを？」——

「魔法にかけられて 白いお部屋で

ひたすらに待っておいでです

「<sup>まくら</sup> 枕 辺には百合と ふくらんだ薔薇の蕾

百合は萎れかけ 薔薇の蕾は硬いまま

背の高い銀色の百合はうなだれて

乾いて暗がりにたたずむ

陽の光がさして水が流れたら

美しく花ひらくでしょうに。



「泣いているより夢をごらんなさい」

©2018TomokoTakiguchi

「王子の旅」より

「お足も<sup>し</sup>には 赤と白の罌粟の花  
血いろの花は産毛の殻に包まれて  
熱い夏を待ちこがれ  
白い蕾は膨らんで 今にも弾けそう  
愁いをおびた死の杯が 今にも開きそう——  
どちらが先に咲くでしょう？」

百もの哀しい声が風に舞い  
百もの喜びの音が疾風に鳴り響き  
「時はつかのま 命はつかのま」と物語を続けた  
「人生も愛も楽しい 今日という日を大切に  
愛は楽しい 明日<sup>あす</sup>のことはわからない  
だから今この時を大切に」

優しく訴えかける歌が流れると  
王子は頬をほてらせ 立ちあがった  
自分を奮い立たせ 追い求めようと  
力強く踏み出した  
意志は弱くても たくましい脚で  
ついに旅立った。

そよ風のふく朝に 旅立った、  
麦の穂が揺れる緑の野を  
世にも稀な 見<sup>み</sup>目<sup>め</sup>麗<sup>うるわ</sup>しい王子が  
喜びはずむ雲雀<sup>ひばり</sup>とともに歌いながら——  
かならず花嫁を獲得するぞ  
暗闇が落ちるまえに。

足取り軽やかに 明るく微笑む王子  
みると柵の踏み段のそばに 乳しぼりの娘がひとり  
桶を足許に置いて休んでいた  
緩やかに波打つ髪 白い肌にほんのり染まる頬  
一マイルは歩いた王子は  
その様子を見て 喉の渴きをおぼえた。

「朝のしほりたてを もらえないか？」——

「どうぞ 喜んでさしあげますわ」 娘は笑った

王子は桶を持ち上げて 新鮮な牛乳をごくごく飲むと

絹のように柔らかな黒い髭をぬぐい

「このうえなく白い牝牛<sup>めうし</sup>が

君にささげたのかい」

それは牛乳、それとも極上のクリームか

彼女は乙女、それとも邪悪な夢か

その瞳がきらきら光りはじめた

王子は立ち去りがたく

娘の瞳をじっと見た 緑色にきらめく瞳を。

「お礼をちょうだい」 彼女は言った——

「金の飾りをつかわそう」——

「そんなのいやよ。金は重くて冷たいもの」——

「びろうどの肩掛けにしよう 凝った舶来ものだ

君の美しさをひきたてよう」——

「首に巻くものなら持ってるわ 軽やかな真っ白の

スカーフがお気に入りなの」——

「頼むから」と叫ぶ王子、「欲しいものを決めてくれ」——

娘は笑って「なんなら満月をもらいましょう

それか この林檎の木陰に腰おろして

わたしと一日ゆっくり過ごしませんこと

そのあとは あなたを自由にさせてあげる

広い世界に旅立ちなさいませ」

とどまろうか 立ち去ろうか

行きかけて やはり振りかえった、

王子として 約束したことは

果たすのが礼儀だから。

天に風が吹きすさび 炎の爪を立てた黒雲が

前方に垂れこめた

林檎の木陰に長々と身を横たえて

王子は娘と笑い 語らった

たくみに編まれた娘の髪は

輝き蠢く蛇のとぐろ

いちにちいちゃ 精妙な毘に

王子は繋ぎとめられた

夜が死を迎え 朝が生まれるころ

梟が静かな暗闇の活動を終え

蝙蝠がひそかなねぐらに戻るころ

ウタツグミとクロウタドリの歌が目覚め

天が暗い羅紗の上着を脱ぎすてて

真珠貝の色をまとうころ

雛菊があちらこちら 顔をのぞかせた

ここにも あそこにも 一面に

雲雀は陽光を胸いっぱい浴びて

希望にみちて空を翔けあがり

月はおごそかに冴えわたり

西の空に沈んでいった。

「起きよ、目覚めよ」夜回りの雲雀が

澄んだ歌声を響かせた。「よく聞け！

高い目標に向けて飛翔せよ

目覚めよ、怠惰をふり払え 朝が生まれた

暗い夜の訪れまで眠るなら

つぎの朝を待つことになろう。」

「起きよ、目覚めよ」悲しい声楽しい声 湧きおこる数多の<sup>あまた</sup>声

「切り倒されて横たわる樹よ

その身を繋ぐ綱を解き放て

うっとり眠りつづけるのか 目覚めは甘くはない

気を引き締めよ なまけずに

すぐさま行動せよ」

王子は出発した。歩むほどに草は消え  
暗い空に病が忍びより  
苔すらもまばらな枯草色になり  
最後の雛菊も立ち枯れて  
歩んできた道は荒れ果てて  
前に続く道はさらに荒れすさみ

割れ目と裂け目に覆われた  
見わたす限り岩だけの暗黒の地  
水のしたたる道筋は黒く  
錆色に干上がり ひび割れに消える  
砂利道や砂地を歩めば  
がらがらと乾いた音が響く

命も愛もなき不毛の地  
動物のねぐら 小鳥の巣ひとつなく  
砂浜に突如現れるのは  
煤けた杭とも見まがう鉄黒色のサソリだけ  
切り立った岩場にもびっしりと  
甲冑を纏うサソリが整列する

命も死もなき不毛の地  
誰ひとり 建てず作らず  
何ひとつ 息をせず息をひきとらず  
誰ひとり 訪れず立ち去らず  
誰ひとり 何もせず探さず語らず  
淀んだ空気に沈んだ地。

その昔 火山が轟き地殻を切り裂き  
黒々と覆ったに違いない  
土の下 沸き立つ地球の深部から  
地面をねじり うねらせて  
もちあげて 高く積みあげたのだろう  
地中から噴き上がる炎で。

後にも先にも足を踏み入れる者のない  
地を歩み 社交好きの王子は倦怠に襲われて  
立ち止まり 入り組んだ果てなき荒地を  
くまなく調べた  
彼をひるませ 待ち伏せする  
孤独の地を。

隆起した岩場にぽっかり開いた割れ目  
薄暗い昼の光さえ届かない  
王子は悲しげに右、左と覗き込み  
ふさぎこんでつぶやいた  
「幸運には生まれついたが  
わたしの運命を織り成す横糸は過酷だ」

昼と夜の境は朧<sup>おぼろ</sup>気で  
暗くもない夜から明るくもない昼に移るだけ  
右方向に曲がる道を  
ずっと ずっと進んでゆくと  
ある晩 灯<sup>あか</sup>りを見つけた  
満たされない心のままに。

大口を開けた洞窟の奥から  
墓場で赤く燃える瞳のような光がさす  
疲れて足取りも重い旅人を  
休ませてくれそうな人影も見えないが  
怪しいならず者のねぐらであったとしても  
声をかけてみようか。

王子は足を踏み入れた。手探りで  
慎重にじつくりと 一步一步進み  
熱く燃える炎にたどりついた――  
年老いた 背の曲がった陰険そうな人物が  
ぐつぐつ煮たつ鍋をのぞきこんでいた  
災いの世界で。



老人はまさに骸骨  
薄汚れて骨ばった指は 鉤のように曲がり  
皺くちやの肌とごつごつした鷲鼻  
ぶるぶる震え 疑わしように  
瞬きをする瞳は 陽の光に  
耐えられそうにはなかった。

物珍しい光景を 王子はじっと見つめ  
ともかくも願い事を口にした  
「<sup>おきな</sup>翁よ ここに泊めてはもらえないか  
くたびれ果てた旅人を？  
宿は見つからず  
食事すらもままならない。」

王子に振りむきもせず老人が答える声は  
隙間風のようにひゆるひゆる鳴った  
(ギンギン震えるような声)  
「願い事があるなら働くがいい  
わしに何かしてほしいなら  
そのために働くがいい

「光と空気から隔てられ 生きたまま地中深く埋められて  
今年でちょうど百年  
寝ずの番で火をおこしておるのじゃ  
薬作りに丁度よい火加減になるようにな  
命の霊薬がここに煮たっておる  
完成に足りないものはただひとつ

「おまえ ここに泊まりたいなら  
そこにあるフイゴを手取るがいい——  
重すぎてわしにはもう持てん  
そう フイゴで火をおこすのじゃ  
薔薇色の湯気が渦を巻き立ちのぼれば  
霊薬に火が通ったあかし

「そうすれば わしのものを好きなだけ  
おまえにやろう 望めば命だってやろう  
老いぼれ白カビが生え 墓場に片足を突っ込んでおる  
わしがまず存分に飲むから  
残りはすべておまえにやろう 誰でも好きな者を  
死から救ってやるがいい。」

「話にのろう」と王子は言って、契約が成立  
まず彼は樹脂を含んだ薪を積みあげて  
希望に胸をふくらませ フイゴを動かした、  
「愛する人とふたり 永遠に生きよう  
たとえ手間取っても その後の命を思えば  
許してくれるさ」

鍋はぐつぐつ泡だち沸きたった  
老人はエッセンスとオイルを垂らし  
金銀鉄の 三重の泡だて器で  
鍋全体をかき混ぜた  
処女地の土をひとつかみ投入し  
火をおこし続けた。

しかし湯気は ゆらりと白く舞うばかり  
夜が昼に 昼が夜に変わっても 薬は未完成  
何かひとつ足りないのだ、老人の霞んだ<sup>かす</sup>目には  
見えないもの 弱った心にはつかめないものが。  
命が彼を見落としても  
死神は必ずや見つけ出すだろう。

やがて百年の月日が満ちて  
秘薬作りが終わった 糸がぷつりと切れるように  
擦り切れた古道具が ぽきりと折れるように  
老人は死に屈した 今まで鍋を混ぜていたはずが  
(ラバのように首は硬直してはいたが)  
一言もなく 急に動かなくなった。

不機嫌な老人の命は摘みとられた  
死んだ手がだらりと垂れて 体がずり下がる拍子に  
死んだ指が煮汁に浸かった  
そのとき湯気が薔薇色に変わり  
死んだ老人の頭のまわりをゆらり  
すばやく取り囲んだ。

あとひとつの材料が入ったのだ。  
(老人が間違えていたか 嘘をついていたかでなければの話)  
王子は単調な仕事を終えて  
ファイゴを脇に置いた、  
泊めてくれた主が死んだのを確認すると  
薬瓶を霊薬で満たした。

「ひと夜だけ休もう」王子は思った、「そのあと  
日の出とともに出発しよう  
朝になれば起きて走ろう  
風が吹こうとも どんなに荒れた天気でも。  
そして花嫁を獲得したときに  
この命の霊薬を ふたりで飲もう」

死んだ翁は 自ら選んだ墓穴に  
この洞窟に ただひとりとどまった  
彼は愚者かならず者か  
それとも真の探求者だったのか  
ともあれ王子は外に出ると 大地に身を横たえて  
眠りをむさぼった。

「もしも姫が待ち続けていたら 眠るように伝えよ  
眠るようと、道は険しいから。  
姫をおろそかにするから平然と眠れるのだ  
眠り 目覚め また眠るの繰り返し  
種を蒔けばいい やがて刈り入れの日がくる  
今、その種を蒔くがいい

「きれいな薔薇が庭に咲いても  
誰も気づかないなら 咲いて枯れても仕方がない  
だけどきれいな花が咲くと知りながら  
散るままに捨て置くなら  
庭にイラクサしか育たなくても  
それこそが収穫 それこそが報い」

王子の眠りのなかで いましめの声が鳴り響いた  
すすり泣く歌が耳を突きさした  
のろのろと 気だるそうに起きると  
深く考えもせず やっと眠りを振りはらい  
青々と葉の繁る方に向きなおり  
遅れてはいたが ふたたび出発した

暗黒の地を後にすると  
荒野はもう見えなくなった  
王子の行く手には花咲く野が広がり  
美しい一日が戻っていた  
彼は命の霊薬の入った瓶を抱きしめて  
ふたたび歩みはじめた。

柳の枝の揺れる道を進み  
カワセミの巣を見つけ  
緑の野が嵐の爪痕のように広がるのを眺め  
赤茶色の野鼠が走るのを見かけ  
しばし清流に沐浴<sup>もくよく</sup>してくつろぎ  
どこかに道連れ<sup>あぐび</sup>がいらないものかと欠伸をした。

丘の上には人っ子ひとりなく  
谷間にも人影はほとんどなく  
葉叢<sup>はむら</sup>が広がるばかりで 新しいものは何もない  
ああせめて また別の娘と出会えたなら  
葡萄酒の瓶をたずさえた娘と  
宴を味わえたらどんなに楽しいか。

のろのろと歩む王子 気は散りやすく  
足取りは重く でも神経はとき澄まされていた  
気がつけば川は曲がり 深い水底から  
波がおし寄せ 土手を洗っていた  
丘の上から水が流れ落ちて——  
そこかしこに 水があふれていた。

高みにも 深みにも  
丘から迸り落ちる雪解けのように  
水の流れが湧きおこり 泡立ち うねり——  
泡立ち ゴボゴボと音を立て 渦を巻き  
押し寄せて 右に左に押し流し——  
王子は命の限りに泳いだ。

岸は、岸はどこだ？——めくるめく渦巻に翻弄されて  
王子の目はかすんだ——どこへ泳げばいい？  
雷鳴のように押し寄せる流れに 耳も塞がれて  
進む水しぶきに息もできない  
楽しい生よ 暗い墓場よ——  
岸は、岸は——どこだ？

そのとき明かりがさして 岸辺から呼ぶ声がした  
「こっちよ——こっちへおいでなさい。岸はここよ！」  
王子は溺れかけても片手でしっかり薬瓶を握りしめた  
投げ出された綱をつかんで——放して——またつかむ。  
砂地に足が届いては滑る  
助かるのか？——望みはあるのか？

呼吸も鼓動も止まりかけて もはやこれまでと思ったが——  
死に吞まれるところを間一髪で救われて  
柳の木陰に横たえられる——  
なだらかに隆起した芝草の上に。  
(ああ、花嫁よ！花婿はいつまでもぐずぐずしているわ  
若くてきれいなあなたが待っているのに)

優しい手と手がかいがいしく 彼の服をゆるめて

優しい声と声がそっとささやく。

「手をこすって温めよう」——「私がやろう」——

「頭を持ちあげて、髪を横に流してあげて」

(たくさんの笑顔があふれる ひとり悲しむ人に想いを寄せることもなく——

だからお眠りなさい、花嫁よ)

こうして王子は手厚く世話をされた

ひとり濡れて束になった髪から 泥水をしほり

ふたりは休みなく 手をこすって温めた

そしてひとり うなだれた頭を胸にひきよせる人がいた

王子が目を開けると 突然のように

ふたりの目と目があった

暗がりに浮かび上がる月のような顔

柔らかな手のぬくもり 優美な愛くるしさ

心を震わす優しい声がささやく

「海を求める川——険しい谷間の

冷たい流れから助けだしたの——

わたしといれば安心よ」

頭上には 小鳥と小鳥が呼び交わし

まわりには 陽気な動物たちがたわむれる

「安心よ 私たちといれば」——声を引き継ぐ声——

「王子よ お友だちよ——

遅れれば、いっそう楽しいものよ

いちばん最後の休息が」

王子がよくよく考えて 思案していれば

一人前以上の男にも、それ以下にも、なっただろう

でも彼はただ 若者らしくふるまった

旅の苦しさを語り——

明日も大変だと訴えた、その間に黄金の

今日という時の砂が さらさらと流れていった。

時が流れて過ぎ去った  
はじまりから終わりまで 無数の時が過ぎ去った  
時が終わりまで過ぎて  
ひとつに収束していった——  
そして賽<sup>さい</sup>は投げられた  
最後の時もいま 過ぎ去った。

時がめぐり 時が過ぎ去り——そう、とうに過ぎ去った——  
戻ることのない川の流れるように——  
楽しげな川が死に向かうように——  
枯れて死にゆく季節のように——  
明日から今日 昨日へは もう戻れない——  
永遠に過ぎ去った。

ようやく出発の日がやってきた  
最後のことは ほんとうに最後のことが  
遠くから どこからともなく大きな声が 響いてきた——  
嘆きいさめる数<sup>あまた</sup>多の声<sup>こゑ</sup>が  
闘いの始まりを告げる喇叭<sup>らっぱ</sup>のように  
鳴り響き うたった

「今も生きているの？——ともし火は消えそうよ  
希望はまだあるの？——彼の到着は遅い  
はるか昔にかわした約束は  
古いふり約束は 守られないまま  
姫は生きているの？——今も生きているの？——何度も  
なんども泣いて 今はまどろんでいます。

「姫は生きているの？——死んでしまうの？——  
うつむいて枯れそうな百合のように しおれています  
乾ききって 息もたえだえの小鳥のように  
よるべなき葡萄の蔓のように  
庭の持ち主に 今日こそ切り倒せと言われた  
哀れな樹のように。」

この歌声に胸をえぐられて 王子はふたたび  
どこまでも続く退屈な道を歩もうと思った  
川の平らな浅瀬を渡り  
対岸の険しい土手をよじ登り  
再び眠りに落ちる前に 粘り強く進もうと  
心に誓った

王子の目の前には <sup>いか</sup> 厳めしい巨大な山が立ちはだかっていた  
ふもとの谷間に岩でしっかり足場をかため  
冠雪をいただいた力強い姿を  
雲が覆いつくしていた  
野生の山羊すら足を踏み入れないほどに  
長く険しい山道がどこまでも続いていた

でも王子はそこを進む力と勇気があった  
仮に軍勢が押しとどめようとしても  
戦ってなんなく打ち破ることができただろう  
若く元気で自信に溢れているから  
誘惑には弱くても 取っ組み合いなら負けはしない  
花嫁よ、今行くぞ、待ち望んだ王子だ。

野生の山羊も近づかない岩場を登り  
鷺が羽を休める難所を越えて  
生物が住まう緑の境界線を通りすぎ  
陽の光の届かない極寒の地に足を踏み入れて――  
砦なき地を守る焔のように  
王子はどんどん登っていった。

荒れ果てた黒い地割れを乗り越えたと  
鷺の群れも疲れて佇み  
わきおこる雲を越えて  
山頂を過ぎると  
さすがに王子の息があがり 力も尽きてきた  
とうとうそこで足を止めた。



見わたせば谷間が広がり  
葡萄酒やパンやオイルが生まれる肥沃な土地が微笑んでいた  
果樹が芳しい香りを放ち  
鳥たちがみな 連れ合いに愛を語り  
宝石が煌めいて 金は赤々と輝き  
遠目にもすぐに見つけることができた。

山の中腹に建つのは  
(緑の斜面に広々と道が続いていた)  
王家の花嫁の住む館  
透きとおる乳白の蛋白石<sup>オパール</sup>でできた  
王家の館、それは王子が  
夢の中だけで見ていた宮殿。

昔のように堂々とふるまえず  
これまでになく疑わしそうに  
おどおど ためらいながら王子は進む  
もう遅いのだろうか？ 日は落ちかけているのか？  
薔薇の姫よ、その薔を 深紅の心を わたしのために  
開いてくれるのか？

勇気をだそう！ 命の霊薬があれば  
花嫁を獲得するのに効果抜群だろうし  
姫の機嫌が悪くても 恋人同士のいさかいなど  
すぐに収まるだろうし  
少しくらい言い争っても それくらいで  
愛がこわれるわけでもなかろう。

遠くまでひろがる王家の領地  
新鮮な滴でうるおい スパイスの香る風に吹かれて  
もう少し歩めば 門に  
到達する そこで旅は終わりだ  
楽しみはすぐそこさ  
いとしい花嫁をこの胸に抱こう。

王子の歩みはゆっくりとなり 門前で止まった——  
姫は起きているのか、眠っているのか？——もう遅い時間だ——  
眠っているのか、寝ずの番をしているのか？  
起きていたはずだ 長いこと待っていたはずだ  
金いろの窓格子の外をじっと見つめて  
辛抱強く歌いながら。

金いろの扉を開け放ち  
花婿が約束した花嫁の元にやってくる。  
金いろのかたいカーテンを開き  
いまこそ互に見つめあおう、  
優しい柔らかな花嫁と 誇らしげな花婿——  
一日はすぐに過ぎてしまうから。

日が傾いて一日が終わった。  
扉の向こうから近づいてくる これは一体なんだろう？  
顔に覆いがかけられて 足を先頭に進んでいる。  
やってくるものを見て 王子は息をのんだ  
これは花嫁なのか、その姿を見ることはもうできないのか  
花婿が死なない限り？

ヴェールをつけた人びとが花嫁を運ぶ  
音もたてずに静かに進む  
香料とマートルの香りがあたりに漂う  
花嫁のための歌がうたわれ その名が調べにのる  
花嫁の歌がたちのほる  
たいまつ  
松明の炎にもいや増して。

「遅すぎる、もう遅すぎる！ 愛も喜びも  
今さらとりもどせない  
あなたは道草ばかりしてぐずぐずして  
門をみつけては誰かとふざけていましたね  
枝の上で魔法にかけられた小鳩は  
連れ合いもなく死にました

塔のなかで魔法にかけられた姫は

眠ってそして死んだのです 鉄格子の窓の向こうで。

姫のお心はずっと餓えたままでした

あなたなのですよ そのお心を待たせたのは。

「あなたの到着が 十年前か五年前

せめて一年前なら

まだ間に合ったのですよ

それでも遅いことは変わらないけれど。

その頃ならばまだ 姫さまのお顔を見ることが

できたのです 今はもう手遅れ。

凍り付いた泉も 水が湧き出でて

薔薇の蕾も膨らんで咲いたことでしょう

暖かな南風が吹いて 雪を解かして

ものみなを目覚めさせたことでしょう。

「こうして横たわる姫さまは お美しいでしょうか？

かつてはお美しかったのですよ

金粉を御髪にまぶしたお姿は

どんなご立派な王様にもふさわしい王妃になれたはず

それなのに今 その巻き髪に罌粟の花

白い罌粟の花を飾り

お顔が見えないようにヴェールを纏っているのです

隠されたお顔に渴望が刻まれています

それともやっと満たされたと言ってもいいのかしら

心配事がなくなった今は？

「わたしたちは 姫さまが微笑むのも

険しいお顔をするのも 見たことはありません

姫さまのベッドは 羽根でふんわりしていても

ご自身にとっては固く寝苦しい寝床でした

着るものに思い煩うことはなく

お衣装や花輪のことも 気に留めませんでした

ティアラの下で白い額は

ずきずきと痛んでいたことでしょう  
やがて 艶のある琥珀色の巻き毛に  
白いものが混じるようになりました。

「わたしたちは 姫さまのあわてた話しぶりを  
聞いたことはありません いつでも穏やかで  
いつでも落ち着いて 優しく  
語らっただけでした  
群衆のざわめきが聞こえても  
心の平静を保たれて  
立ち居ふるまいは 急ぐことなく  
ゆったりとしておいででした  
思わずかけよって出迎えるような  
心楽しい出来事ありませんでしたし。

「きのうであれば 泣いていただいてもよかったのです  
ベッドの上で弱ってゆく姫さまのために。  
でも お亡くなりになった今 今日という日に  
泣いてどうなるというのです？  
わたしたちは姫さまを愛しているから 泣いたりせず  
その高貴な御髪に冠をのせます。  
わたしたちが敷きつめた罌粟の花をそっとしておいて  
あなたがお持ちの薔薇の花は赤すぎます。  
罌粟の花をそのままに そっとしておいて  
あなたのために摘んだ花ではないから。」

## “The Prince’s Progress” by Christina Rossetti: A Translation

Tomoko TAKIGUCHI

### Abstract

“The Prince’s Progress” is the first poem in the second collection of poems by Christina Rossetti (1830-94), entitled *The Prince’s Progress and Other Poems* (1866). It is written in an allegorical fairy-tale style, and its suggestive details have invited interpretations from various perspectives such as religious symbolism and the genre of quest-romance. The poem has also been analyzed in comparison with other allegorical stories it alludes to, especially the fairy tale “Sleeping Beauty”. Here I offer a Japanese translation of this intriguing poem, hoping to successfully emulate its elaborate structure and convey the symbolism of sleeping and waking.